会場　府中市こどもの国ポムポム

多くのことを教わります。後半のすもう大会は、お孫さんがおられる方はもちろん、おられない方も応援に来ていただいています。そういった方々のために、子どもたちの発案で、見学者用のソファーを地域の方に寄贈していただき、置くようになりました。本来ならPTAがすることを手伝っていただいたことで、よりよい活動ができています。

小野　最近、他所では、PTAの会員が共働きなんかで減ってきていて、関わりも少なくなってきているという話も聞きます。

松尾　活動する時間が限られてしまうんです。育児はもちろん、仕事もあるし、PTAの活動もあるしでどれを優先させるかとか…。毎年の環境整備も以前は1日仕事でしたが。しかし、今は地域の方たちの参加もあり、短時間で終わったりするんです。短時間だったら協力できるという人が増えています。無理のない形であれば、協力したいと思っている人ばかりだと感じています。

小野　教育現場の方はどうですかね、教育長。先生の働き方というのがいろいろと話題になっていますが。

平谷　そうですね。当初は、行事に子どもたちを参画させるということで、授業もある、また参画の仕方も考えないといけないと、負担感はあったと思います。ですが、一方では地域の方が、学校に関わって、ゲストティーチャーとして子どもたちにいろんな話をしていただいたり、家庭科の時間に教えてもらったり、自分たちと同じ目線で子どもたちを育ててもらっている。また、地域のことなど先生たちが分からないところも、地域の方から教えてもらったりもしています。その他にも、コミュニティ・スクールの中で、「先生はあれこれ忙しいと聞くけども、子どもたちの教育に専念して、子どもに学力を付けてくれたらいいんだよ」と言っていただいて、その言葉に先生たちが元気付けられたとも聞いています。学校にとったら、とても心強いと思います。

小野　まさに、コミュニティ・スクールが浸透している証拠ですね。

立石　当初はね、「なんにゃー、そりゃ」って、ましてや学校運営協議会という呼び方もあるでしょう。もう、おじいちゃん、おばあちゃんは混乱しますよ。そこで、地域の人たちに分かりやすい言葉がないかなと一生懸命考えて、「地域の中に、学校を！学校の中に、地域を！」というキャッチフレーズを作りました。これを配布するプリントに必ず書いてもらったりして広めました。道徳の授業では、「最後の年越しそば」という題材で、癌宣告をされた人が、最後になるであろう年越しそばを作ってあげるという学習をした後に、実際に癌で奥様を亡くされた地域の方が自分の実体験をお話されるという授業がありました。その実体験を子どもたちは、涙を流しながら聞いていましたよ。これが生きた教育・授業なんです。こういうことができることで、地域と学校が相互に関わるようになっています。この成果が、学校へのクレームもほとんどなくなり、不登校もここ何年かほぼ0になっています。

小野　なるほど！南小学校は地域の人と関わりが増えて、子どもたちの変化というのはありますか？

松尾　子どもたちは、地域の人がいることをあっという間にあたり前に感じてますね。それこそ私の娘も、スーパーで娘が地域の人に気付いて、挨拶して、地域の人も娘の名前を覚えていただいていて、そこから私も「いつもお世話になっています」とお話できたりしています。

立石　私はここが地元で、府中明郷学園へ通っていたので、大切な学び家でふるさとです。私も地元から一旦出てから帰ってきたんですが、勉強に出て行っても帰ってきてくれる子どもたちを増やしていかないと、出っ放しで帰ってこない子どもたちばかりの地域を作っていてはいかんなと思っています。これは私の持論ですが、「故郷に錦を飾る人も素晴らしいですが、故郷で錦を織り続ける人を作っていかにゃーいかん！」そうしないと、地域はどんどん疲弊していくばかりと思うんですよ。

今年、コミュニティ・スクールの一環として、府中明郷学園で模擬会社を作って、子どもたちに起業家精神（アントレプレナーシップ）の芽を出してもらおうとしています。自分たちで製品を開発し、製品化し売るところまでもっていこうとしています。子どもたちが地域の企業に行き、職場体験し、製品開発の案を発表してくれました。まあ本当に自由でユニークな発想をするわけですよ。この取り組みの核は、地域にある企業を子どもたちが知ることです。そして、先生や親も知っているのは、あそこに会社があるなくらいですよ。どんな会社かも分からない、作っているものも知らない場合、子どもがもし就職するとなったら「やめときなさい。もっといいところがあるでしょ。」とこういうふうになるわけです。実態を知ってなくしていくんだ、こんなことを無くしていきたいんですよ。そのために企業さんにもどんどん協力してもらっています。

小野　府中明郷学園の取り組みは新しいステップに進んでいますね。南小学校も、社会見学や職場体験でも保護者だけでなく、地域の方も行くことで、一緒にできない会社の内部や作っている製品を知り、企業を知るという点では同じなのかもしれないですね。

立石　南小学校の取り組みは府中明郷学園ではやっていないので、今度やってみましょう。

平谷　こうやって相互に新しい取り組みが増えるのもいいですねー。

小野　府中明郷学園の模擬会社の取り組みで、会社を作るのが最終目的じゃなくて、物を売るためには説明するのでコミュニケーション能力を高めて、調べ物をして、計算もするので算数・数学も国語も実体験をとおして学べるところも面白い取り組みですよね。

立石　これを仕掛けた校長の一番の目的は、これから第4次産業革命が起こり職業の半分がなくなっていくであろうと言われている中で、子どもたちはそんな時代に生きていくわけです。そこで覚えるだけの教育だけでなく、自分の力で対処していく力を身に付けてほしいということです。そこに私は、地域づくりも合わせて捉えていきたいと思っているわけです。

小野　課題発見と課題解決をどう身に付けていくかというのはよく言われていますが、それを実体験で学べる場所はいいですねー。

平谷　実はこれは文部科学省の取り組みの一環ですが、これからの世の中を生きていく子どもたちが、どんな力を付けなければいけないか、それを学校教育の教育課程の中でどう仕組んでいけるのかという中で、府中明郷学園がアントレプレナーシップ開発カリキュラムの事業に取り組んで、先日も国の研究者の方が来られて、これは面白いものになるのではないか！と関心を高めておられました。

立石　そりゃー、大変なことだ！私たちも手探りのところがあって、子どもたちがそこまで出来るのかというところもあるし、1つは失敗をして、そんな簡単には成功しないというのも知ることも勉強なんでね。

小野　そうそう。

立石　あまり肩肘はらずにやろうと思っています。模擬会社は、義務教育学校7年生・8年生が2年間で取り組むんです。子どもたちは楽しんでやっていますよ。

小野　私たちのころには考えられないことですよ。

立石　会社を作ってお金の話を子どもがするっていうのは、考えられないですよ。子どもたちが、製品の値段で、「いくらで売るんですか？」「それで合うんですか？」「安すぎませんか？」とか出ていましたよ。（笑）